

現代の若者たちへ

「この前、俺一回死んだんだよ」

城孝男さん(64)は、突然そう切り出した。剣道の練習中、心臓発作を起こし、偶然居合わせた看護師と医者のおかげで、一命をとりとめたのだという。その時の話を楽しそうな表情で話す。

高校で古文を教えている城さんは、30代前半、日雇い労働者の集まる山谷で数年間、路上生活を送った。鍛えられた身体に、きちんと整えられた白髪、水色のワイシャツ。紳士的な風貌だった。かつては長髪で、風呂にずっとはいつていなかったという当時の面影は残っていない。いざ路上生活時代のことに話が及ぶと、先生の表情はこわばった。

戦後、日本政府が民主主義を掲げ平等を謳う一方で、資本主義が興隆し、人々の経済格差が大きくなった。多くの人々がそんな世の中の矛盾に疑問を持ち始め、朝鮮戦争やベトナム戦争が始まると、学生運動が活発になっていく。このような時代に大学生だった城さんは、学生運動に熱中する。

「髪短くして、会社入って……ってのは考えられなかったなあ」

大きな矛盾を抱えているはずなのに、世の中は淡々と進んでいく。何のために革命を求めていたのか。友人の給料を頼り一日中部屋に籠る生活を送った。1年ほど経過したころには、「落ちるとこまで落ちてしまえ」という墮落願望のようなものに苛まれていた。城さんは友人の家を出て、山谷の「ドヤ」と呼ばれる安宿に住み始めた。

山谷は身体も心も弱い人間が集まる場所だった。山谷の日雇い労働者たちの多くは、家族や友人との縁を断ち、本名や過去を語らず、孤独な生活を送っていた。しかし、そんな環境にあっても、城さんは自分を見失うことはなかった。日雇い労働者として働いた土方の仕事は大変な肉体労働だったが、汗を流してひたすら穴を掘っている間は、何も考えなくていい。頭を空っぽにできるこの時間はむしろ、城さんの山谷での生活を気楽なものにしていた。

このような生活が二年ほど続いたある日、心境の変化が訪れた。宿代が払えなくなり、公園で寝泊まりを繰り返すという路上生活に追い込まれた。上野公園のスロープ状トンネルで寝ていたある晩、坂の上の方から、城さんの頭に誰かの寝小便が流れてきた。

「汚ねえなあ、よいしょ」

と、身体の向きを変えた。そのとき城さんはハッとした。身体の向きを変えただけで、また眠りにつこうとした自分に驚いたのだ。山谷での生活が続くにつれ環境に適応しすぎてしまったことに対する危機感を覚えた。そして、山谷を抜け出すことを決心する。

学生時代の友人に金銭的な援助を受けながら職を探し始めた。しかし、簡単には見つからなかった。そんな折、かつての仲間が横浜で教師をしているという噂を耳にする。

「あいつにできるならおれにも」。

そんな単純な思いつきだったが、通信講座で必死に勉強し、36歳で教師となった。

「経済は右上がりだったから、路上生活をしていても餓死する恐れがなかった。社会が人々に夢を与えてくれた。でも今は、不況の中、社会が与えてくれるのは『頑張れ』の言葉だけだ。」

城さんが山谷で過ごした当時と社会状況は大きく異なる。かつて山谷の日雇い労働者が担っていた仕事は、現在彼らには回ってこない。彼らの立場は弱くなるばかりだ。社会から夢を与えられない若者の中には、一度失敗を経験すると立ち直れずに引きこもってしまう者もいる。城さんはそんな若者に次のように言いたいという。

「生きていれば方法なんていくらでもあるじゃないか」

挫折に決着をつけないと、人は前に進めない。

「自分のやっていることに意味が見いだせないのが一番きつい。どんな環境におかれても、本来の自分が頭の中にいれば大丈夫」